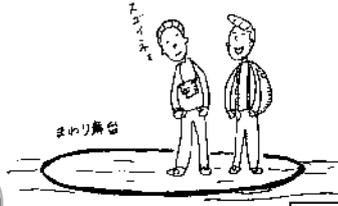


シリーズ 阿久比を歩く ①27



大古根八幡神社の「常舞台」

「あの家の瓦、いいですよ。外壁もなかなかです」。町内で残る古い建造物を巡ることになった。念願の一軒家を手に入れた友人の視点が、最近「建物」に興味を引かれていたのがきっかけとなった。神をまつるために楽器や舞を奉納する場所が神楽殿。その神楽殿のことを「常舞台」と呼ぶ。以前から地区の神社に行くと、目にしてきた常舞台を訪

建造物を見る(常舞台)

あ
ぐ
い
ぶ
ら
り
旅

ねることにした。阿久比町誌によれば、町内十三の神社に現存する。はじめは、神への奉仕の場として設けられていた神楽殿は、次第に豊作の喜びを表現する常舞台へと変化し、老若男女が神と一緒に祝いで喜びを分かちあうようになった」と解説される。「回り舞台」のある、大古根八幡神社の常舞台を見に出掛けた。「お城のような屋根ですね。入母屋造りですよ」と友人が言う。さすが目の付けどころが違うね。そんな専門用語よく知ってるねえ。「家を建てる前に勉強しましたから」。どしどしと構えた建物は、昭和二年の建造。木造瓦葺で屋根の形は入母屋造り。正面の大きな扉と外壁の板張りは、くぎで補修された部分と虫に食べられた穴が目立ち、建物の古さを物語る。知多半島では珍しい「回り舞台」を備える。歌舞伎の世界では、床を大きく円形に切り抜き、円板を回転させて劇の場面を換える舞台装置として使われる。

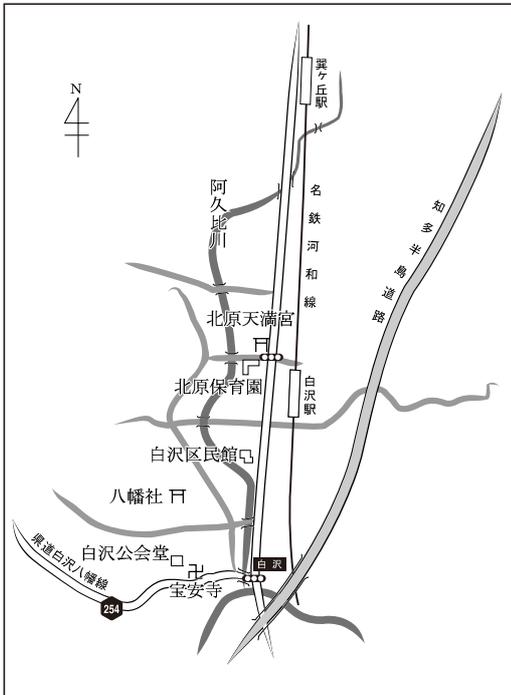
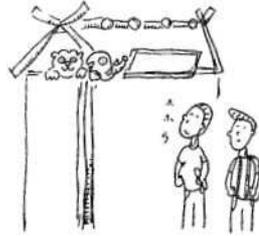


“回り舞台”

大空襲で消失した名古屋大須の芸場の舞台をまねて造られた。昭和三十七年まで祭礼の余興で、大阪や名古屋などから芝居役者を呼び、村芝居が行われていた記録が残る。現在では、春の祭礼のときに正面の扉が開かれ、舞台では囃子の奉納が行われる。大古根地区の方に頼み、中を見せてもらった。床の上に立つとミシミシ音がする。見ることはできなかったが、舞台下は百二十センチの深さがある。床下で梶棒をかついで舞台を回すのが本来の仕組みのようだ。「足の力で青年団の人が舞台を回しているのを見たよ」「四谷怪談」がよかったなあ。「子どものころ、役者の風呂たきをするのが、私たちの仕事だったよ」。年配の男性たちが思い出を語ってくれた。「回り舞台の床下のことを、『奈落』と言うらしいけど君知ってた？床下は暗くて『奈落の底』にたとえたらしいよ」と私が友人に問い掛ける。「意外に物知りですね」「少し予習してきたからね」と自慢げに答え、八幡神社を後にした。

シリーズ

阿久比を歩く ⑫



八幡社本殿

白沢地区八幡社の本殿を八十一歳の長老が案内してくれた。「本殿が完成したときに、東西から二手に分かれて、青年団が木遣節を歌いながら威勢よく棟木を祝いこんだなあ。どちらが先に入るかで、もめごとになったが、元氣のよかつたわしら西が先に入ったよ」阿久比町文化財調査報告『阿久比の建造物と彫刻』の中で、紹介される八幡社本殿の「木鼻」を見ることが

あ
ぐ
い
ぶ
ら
り
旅

建造物を見る（木鼻）

が今回の目的。木鼻とは「鼻は端という意。頭貫、虹梁、肘木など横木の先端が柱を超えて出たものに、装飾的な彫刻を施したもの。鎌倉時代の禅宗様、大仏様に起こる」と解説される。

拜殿の後方にある本殿は、昭和二十七年に改築されたもの。玉垣で仕切られ、近くに寄ることはできない。正面の部分に二本の縦柱があり、その柱を支えるため前横に頭貫、後ろに虹梁を取り付けられ、直角に交わる左右の二カ所に「木鼻」がある。正面が「獅子」、横はゾウのような長い鼻と牙を持つ「猿」の彫刻が施される。頭貫の中央上部には、龍、脇障子にも、きめ細かな彫り物が見られる。

獅子や猿の木鼻は「大仏様」の建築物に多く装飾されたようだ。鎌倉時代初期、重源が東大寺再建に当たり宋の様式を採り入れて創始した建築様式が「大仏様」。もとは寺院で使用されたものが、神社でも使用されるようになった。



獅子と猿の 木鼻

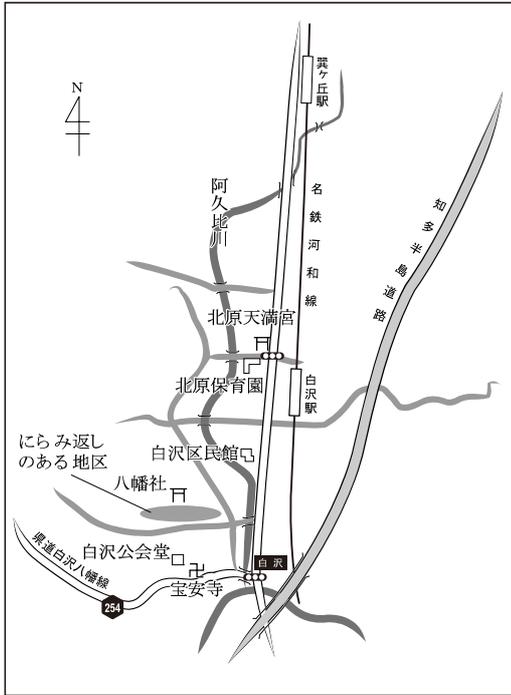
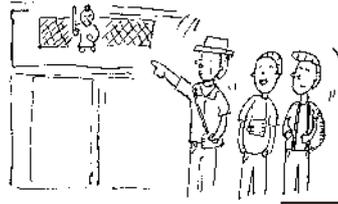
地元の大工職人が本殿造営に関わった。当時、熱田神宮に通い、造営についていろいろな手ほどきを受けたとのこと。山車彫刻で有名な新美常次郎「彫常」の名前も記録に残る。大工職人と彫刻師の調和が後世に残る立派な本殿を築き上げた。

「腕のいい大工さんたちで、一人は、わしより六つ上の先輩。今でもこの場所でお参りする姿を見掛けるよ」と長老。神社境内で開かれる「津島祭」予告の張り紙が目についた。木遣節を歌いながら祝い込んだころが懐かしいよ。もう少しすると、今年もまたにぎやかになるなあ。長老の背筋が真つすぐに伸びた。

普段気にすることもない、伝統的な建築様式が身近で見ることができた。木鼻なんて初めて聞く言葉でした。造り手の「侍魂」を感じましたよ」と友人が言う。「侍魂」はサッカーW杯の見過ぎだろう。それを言うなら「職人魂」だろ」と私が返す。

シリーズ

阿久比を歩く ⑫



民家のベランダに取り付けられだにらみ返し”

白沢地区の民家のベランダに、瓦製の怖い顔をした「小さな人形」が取り付けられる。道路を隔てた向かいの民家の鬼瓦をにらむ。人形の正体は、中国から伝わる、疫病神を除くという魔よけの神「鍾馗」。にらみを利かせることで、隣家の鬼瓦によって除かれた災いが、自分の家に降りかからないようにと行われてきた風習で、その「鍾馗」をにらみ返し」と呼ぶ。

建造物を見るへにらみ返し

あ

ぐ

い

ぶ

ら

り

旅

—唐の玄宗は、科挙試験に失敗し、自らの命を絶つた鍾馗を哀れみ、手厚く葬った。あるとき、玄宗が病に伏し、高熱に苦しむ悪夢を見る。虚耗という小鬼が現れ、楊貴妃の香袋と笛を盗もうとする。そこに鍾馗が現れ、帝に吊つてもらった恩返しにと、鬼退治をする。夢から覚めた玄宗の容態はすっかり良くなる。— 邪気が建物の中に入って来ないようにと、屋根の棟の両端に取り付けられる「鬼瓦」。寺の多い京都の町家では「鬼瓦」からの邪気を追い払うため、鬼をも退治する「鍾馗」が、屋根に飾られる。事典を調べると、鍾馗の人形を大屋根や小屋根の軒先に飾る風習は、近畿〜中部地方で見られるとのこと。 地元で詳しい八十一歳の男性が「にらみ返し」について話してくれた。 「鍾馗さんが飾られる家は少なくなつたねえ。この家は築五年くらいだけど、建て替え前の家にあつた鍾馗さんを引き続き飾つたと聞いたよ。向かいの瓦に『水』とあるでしょ。

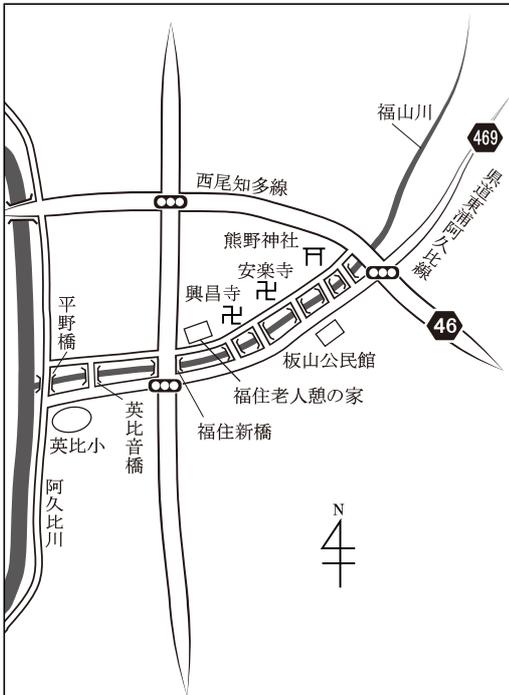
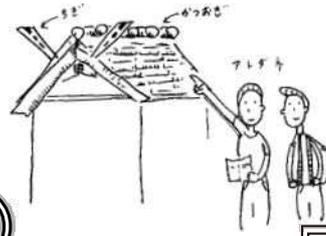


にらみ返しの向かいにある「鬼瓦」

あの鬼瓦をにらみ返ししているんだよ。 鬼瓦は鬼の形をしたものだけではない。「水」とあるのは家を火事から守るためだろう。 「隣の家同士、仲が悪かった訳ではないですよ」と友人がこつこつとと言う。「それはいいよ。皆さん近所同士仲がいいし、『にらみ返し』や『鬼瓦』のある家の人たちは、気さくで明るい人が多いよ」と男性が笑う。 「我が「鬼嫁」を、すっかりと、にらみ返ししているんだけど、僕の言うことをなかなか聞いてくれないのはどうしてかなあ」。私が愚痴を言うとうとうにらみ返しが、奥さんの目を見ないからじゃないですか」と友人に軽くかわされた。「にらみ返し」から目をそらし、空を仰いだ。青い夏空が広がっていた。

シリーズ

阿久比を歩く ⑬



5本並ぶ堅魚木

神社建築の象徴といわれる「千木」と「堅魚木」を確かめに、板山地区の熊野神社を友人と二人で訪れた。千木は神社本殿の屋根の両端に交差して立つ飾り。堅魚木は棟木の上に直角になるように何本か平行に並べた装飾の木で、円柱状で鯉節に似ていることが「堅魚木」の名前の由来であるといわれる。千木には先端を地面に対して水平に削った「内削ぎ」と、垂直に削った「外削ぎ」の形があるようだ。インターネットで調べると、千木が内削ぎになっているのは女神、外削ぎになっているのは男神がまつられると紹介される記述が多い。また、堅魚木の数も偶数は女神、奇数は男神がそれぞれまつられるとのこと。

あぐいぶらり旅
建造物を見る(千木と堅魚木)

熊野神社境内で写真を撮る男性がいた。写真を撮っている理由を尋ねると、「拝殿が新しくなり、記念誌を作るためだ」と言う。真新しい拝殿からヒノキのにおいが境内に漂う。熊野神社では二十一年に一度、境内の建物の修復作業などを行う。地元では「遷宮」と呼び、今年はその年に当たる。拝殿奥にある本殿は、二十

「外削ぎ」の千木で、堅魚木は十本で女神の「天照大神」がまつられる。「豊受大神」がまつられる。「外宮」は「外削ぎ」の千木で、堅魚木は九本。男神がまつられているかと思いきや、実は豊受大神は女神。すべての神社が先述の法則にはあてはまらないようだ。

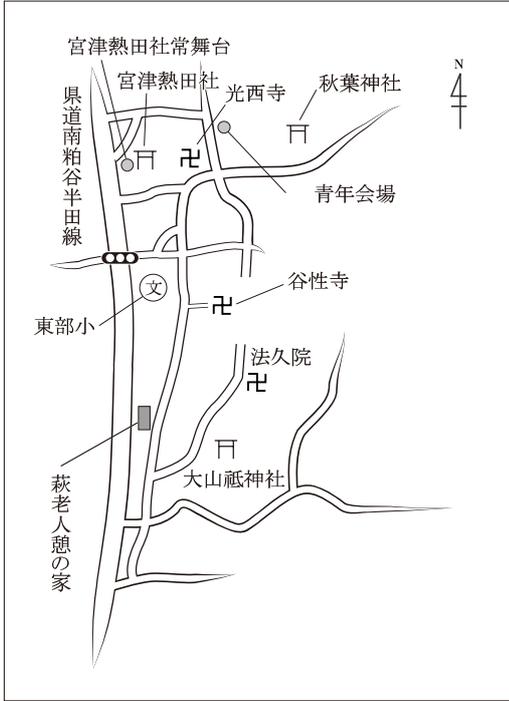


内削ぎの千木 中央)

年前の「遷宮」行事で建て替えられたものだと言った友人が教えてくれた。銅板葺きの屋根には、内削ぎの千木が飾られ、五本の堅魚木が並ぶ。熊野神社は紀州熊野三所権現を分祀したのが始まりとされ、現在では、いくつかの「神」が合祀されている。「千木の形からすると、女神さんがまつられているはずだね。だけど堅魚木の数は奇数だとすると男神か?」。私が首をかしげる。「そう言われるとそうですよ。まあ、いろいろな神様がいるということじゃありませんか」と友人。「整いました。堅魚木と掛けて、うどんに振り掛ける鯉節と解きまます」。その心は「どちらも上に乗っています」。最後も友人がうまくまとめた。セミが騒ぐ境内を後にした。

シリーズ

阿久比を歩く ⑬



境内を見守る「力神」

宮津地区熱田社は、盆踊りの準備で人の動きがせわしい。暑さ厳しく、セミの鳴き声も騒がしい。そんなにぎやかな状況を、常舞台正面上部に取り付けられた一對の「力神」が見守る。

建造物を見る（宮津熱田社 常舞台力神）



宮津地区熱田社は、盆踊りの準備で人の動きがせわしい。暑さ厳しく、セミの鳴き声も騒がしい。そんなにぎやかな状況を、常舞台正面上部に取り付けられた一對の「力神」が見守る。

木造瓦葺入母屋造の常舞台は、弘化四（一八四七）年熱田社境内に造営され、原型を残す。昭和三十年ごろまで村芝居が盛んに行われ、多くの人々が観劇をした場所。力神も弘

化四年に作られ「寄木彫」であると記録に残るが、製作者は不明。二体の「力神」彫刻が建具に腰を下ろす。眼光鋭く、筋肉隆々。前かがみになり、常舞台の梁を片腕で、下から力強く持ち上げるような姿勢は勇ましい。「僕は『キン肉マン』のマンガが大好きなんですけど、力神はどことなく似ているところがありますよね。好きになりそうです」と、友人が物を持ち上げるようなポーズを取り「力神」の真似をする。見るからに貧弱だ。そのポーズキン肉マンと力神に失礼だよ」と私が返す。力神彫刻は、知多地方の山車や神社の山門や本殿に施される。寺の山門で、仁王像や金剛力士像が門番をするように、「力神」は「神」が関わる場所の見張り役のようだ。境内で作業をする長老たちに力神について尋ねる。「常舞台と力神の組み合わせは今までに見たことがない。なんであの場所にあるかは知らないな。顔が取



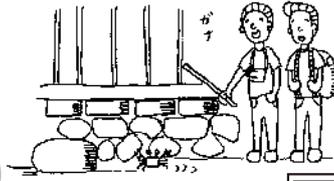
顔の取り外しを試みる男性

り外せると思ったで、中に何か書いてあるかも知れん。一回見てみるか」男性が準備の手を休めてくれ、フオークリフトの荷台に乗り、顔の取り外しを試みてくれた。しかし簡単には取れない。貴重な彫刻を傷つけてはいけないので、確認はあきらめることにした。「我々、長く宮津に住む者も知らんことばかりだよ。何か古い記録が出てきたら、また教えてあげるわ」と長老らが笑う。

製作者は誰なのか。常舞台と力神の関係。多くの謎が残る。本当のことは「力神」のみぞ知る。「そう言えば、力神のぶくっとしたところ、生後二カ月の息子にも似ています」。将来はキン肉マンにさせたらどう?」

シリーズ

阿久比を歩く ⑬



あぐいぶらり旅

建造物を見る（若い衆蔵）



“若い衆蔵”の格子窓

昔ながらの黒壁が残り、かつては商店などが立ち並んでいたという宮津地区の「メインストリート」を友人と二人で歩く。

昭和二年建築で、木造瓦葺二階建ての「旧阿久比郵便局舎」に立ち寄る。もともと個人所有の建物で、表札が掲げられているが、現在は空き家のような。博物館や観光地の古い町並みで見られるようなレトロな感じのする建



物。友人が「大正ロマンを感じますね」とポツリ。実際は昭和の建築なので、時代が少し違うが、確かにそんな雰囲気だ。

メインストリートを北へ進む。自動車ですれ違うには少し狭い細道。春には、宮津地区自慢の二台の山車がこの道を通り抜ける。

宮津青年会場が見えてきた。地元、年配の方には「若い衆蔵」と呼ばれる。江戸時代の天保年間（一八三〇～一八四三）の建築であると記録が残る。宮津地区の二十歳前後の若者が

神楽囃子などを練習してきた場所。戦前までは、ほかの町や村から見物にくるほど、盛大に神楽囃子の稽古が行われていたようだ。今もその伝統は引き継がれ、祭礼の前に、囃子などの稽古が行われる。

入口に「神楽社」と書かれた額が掲げられる。切妻屋根で、屋根瓦の最上部に「若」の文字の瓦がのる。壁は板張りと漆喰。上部の漆喰壁部分には格子窓。どっしりとした蔵のような構造は、天保年間から変わ



カニも迷い込んだ御影石が積まれた基礎

ることなく今に残る。近くの民家を訪ねた。突然の訪問であつたが、優しいような夫婦が、面白いエピソードを聞かせてくれた。

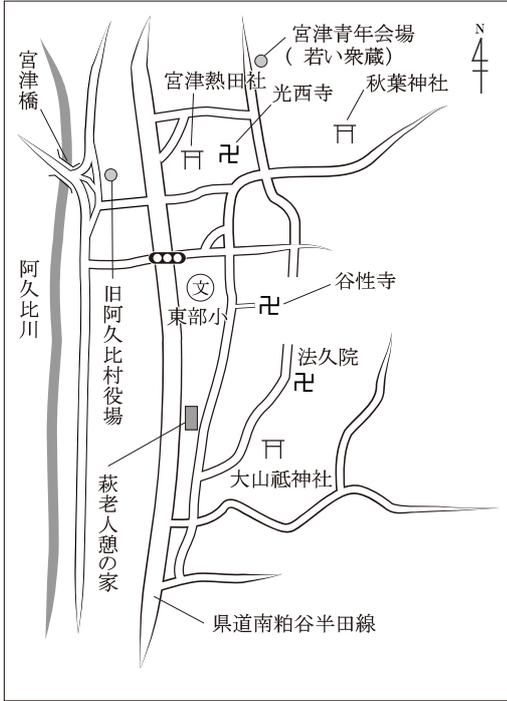
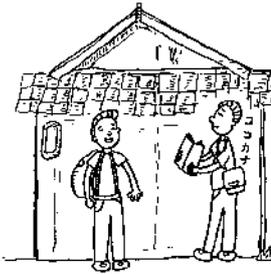
「この石なんですか？」と尋ねる。大きな円形の石に三十貫と記され、半分ほどコンクリートで固められる。「祭礼のとき若い衆は大太鼓を担ぐ仕事があつたから、担げるか試すための石で『カ石』と呼んでいたけど、石のことを知る人も少なくなつたなあ」とご主人。

「この穴『ガナ』って言うんだけど、水路を伝わってきた小さなカニがガナに隠れていてね、こうやって棒で突つくと、怒って泡を吹いて出て来るんだよ」。御影石でできた「基礎」のすき間部分を、木の枝で指しながら、少年時代の話に夢中になるご主人の横で、奥さんがほほ笑む。

帰り際に「僕もまだ、フットワークも軽いし、若い衆でいけますかね」と友人。「昨日も昼食食べながら、肉よりも魚が好きになつてきたと言っていたから、ちょっと難しいかもね」。

シリーズ

阿久比を歩く ⑬



旧阿久比村役場入り口

旧阿久比村役場を探しに友人と二人で出掛けた。宮津地区の西森下地内で、宮津橋東付近に現存しているらしいので、近くに住む人に訪ねながら目的地へ向かう。
「役場があつたげな」と、話は聞いとる。昔、庄屋さんたちがあつたあの辺だ。宮津橋拡張で建物は取り壊されたが、近くに駐在所もあつたなあ」と長老は言う。
旧阿久比村役場は、明治三十九年

建造物を見る(旧阿久比村役場)



に東阿久比村、上阿久比村、阿久比村の三村が合併したときの村役場で、大正十五年に阿久比神社南へ庁舎が移転するまで使用された。その後、役場は昭和三十四年現在地に移転する。
県道南粕谷半田線から西に向かう細道を歩く。目の前に、黒塗りの高い塀。その奥には日本建築の住居と蔵が並ぶ民家。後方に、宮津団地の各棟が立ち並ぶ光景が目に入る。
長老が教えてくれた場所に着く。雑木林からは猛暑の終わりを告げるかのようにツクツクボウシの鳴き声。畑仕事をする男性に声を掛ける。
「昔の村役場を探しているんですか。」「わしが今、住んどる、ここだ。」「ここですか？」

旧役場は民家となっていた。平家建ての古い建物で、漆喰が塗られた壁は、ところどころはげて、土壁がむき出しの部分もある。役場であつたとは、言われてみなければ分からない。周辺の建物の雰囲気から、長老が言っていたように、一昔前は



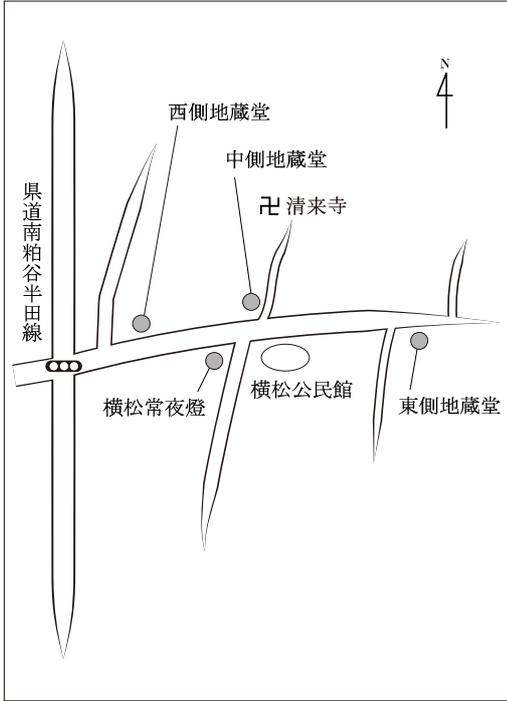
旧阿久比村役場北側

人々が集まるにぎやかな場所であつたことがうかがえる。
話してくれた男性は八十歳。西向きに入り口があつたと説明を受ける。家に残っていた当時の写真を見たことがあると言う。
「村長は、鼻の下に長い立派なひげをはやしとつた。かすりの着物を着た女性の事務員が三人、四人いて、床を引きずるような長い髪の毛だつたような気がする」

私たちの先輩職員の話だ。少ない職員でいくつもの仕事をこなしていたようだ。
「あんたら役場で頑張つて、ええ仕事やつてくれや」と男性からエールを送られる。身の引き締まる思いで、旧阿久比村役場を後にした。

シリーズ

阿久比を歩く ⑬④



重厚感漂う瓦が乗る入母屋造の屋根

あぐいぶらり旅 建造物を見る（横松地蔵堂）

田んぼのあぜ道に、ヒガンバナが咲く。「暑さ寒さも彼岸まで」。昔の人はうまいことを言う。彼岸を過ぎて暑さも少し和らぎ、めっぼう過ぎしやすい季節となった。横松地区の地蔵堂を友人と二人で訪ねた。県道南粕谷半田線を横松交差点南の信号から東に入った、横松地区のメインストリート沿いに三つの地蔵堂が存在。一番西にある地蔵堂を見

木造瓦葺入母屋造で江戸時代後期の建築。面積が約二十平方メートルで、屋根には重厚感漂う瓦が乗る。南北の棟の両端には鬼瓦。鬼瓦の邪気を取り除くためか、以前白沢地区で調べたにらみ返し（鍾馗の人形）が、南北の向かいの民家に一つずつ見られる。地蔵堂近くを通りかかった男性に声を掛ける。いわれなどを聞いてみた。「わしのうちもそうだけど、この辺の人で、『地蔵さん』に『おぼくさん』をあげとるよ」地元では地蔵堂のことを「地蔵さん」と呼び、近くに住む人々で順番に、ご飯と水供える慣習が続く。毎年八月十七日の夕方、お堂近くに住む女性たちが集まって供養が営まれる。地蔵堂の扉を開けてもらい、中を見る。地蔵と高さ十センチほどの数多くの仏像が安置される。仏像には亡くなった先祖の名前が書かれているようだ。



地蔵堂の中に安置される地蔵と仏像

男性と話をしているうちに、近所の女性たちも会話に加わる。「夏、みんなが集まるときは、お寺の『おっさん』に、お経をあげてもらったけど、今は自分たちで、テープをかけて、お参りしとるよ。明日は私のところが『おぼくさん』をあげる番だわ」「地蔵さんを大切に守っているんですね」と私たちが問い掛けると、「分かんけど、なんとなくねえ。まあ、昔からやっとなることをなかなかやめられんもんね。元気で健康に暮らせているし、近所も仲良くできるしねえ」。集まった人たちがお互いに顔を見合わせた瞬間、高らかな笑い声が地蔵堂の周りに響き渡った。いつの間にか、男性一人と女性三人、私と友人の六人が会話を交わっていた。しばらく皆さんの話に耳を傾けた。



ゴウテンジヤウ
マツアサノイキ



シリーズ

阿久比を歩く ⑬



“反り”の曲線が美しい蓮慶寺の屋根

大古根地区の蓮慶寺を友人と二人で訪ねる。県道阿久比半田線を南に進む。植大駅西信号を過ぎ、しばらく行くと、右手前方に寺の大きな屋根が見えてくる。参道の長い坂を上りきり、蓮慶寺に着く。境内に入ると、東向きを正面に、町内寺院では最大の本堂が建つ。遠くから見えていた屋根を目の前

建造物を見る（蓮慶寺）

あ

ぐ

い

ぶ

ら

り

旅

な錯覚を感じるほどの壮大さがある。勾配の急な屋根造りで、“反り”の曲線が美しく、棒状の瓦が流れ落ちてくるようだ。住職が声を掛けてくれ、本堂を案内してくれた。石坂山蓮慶寺は真宗大谷派に属する。本堂は文化八（一八一）年に、落慶。内部は内陣、外陣、大間に分かれる。内陣中央には本尊「阿弥陀如来」が置かれる。上を見上げると、屋根付きドーム球場のように天井が膨らむ。「二重折上げ小組格天井」と呼ばれる珍しい建築様式が使われる。外陣は狭く、広い大間は門徒が集う「道場」で、四隅にはケヤキの太い丸柱が立つ。「この寺の建造には『横松大工』が深い関わりを持っていることが最近分かりました」と住職。本堂や大門（山門）再建の棟札には、知多地方の山車造営に深く関わった横松大工の名が残る。本堂の大工棟梁は、横松 清兵衛、大門再



天井が膨らむ 格天井”

建棟梁には「横松 江原新助」の名が記される。横松大工は、神社や仏閣の建築を主とした「堂宮大工」。木組みだけで造り上げる卓越した技術は非常に評価が高い。江原新助は明治二十四年、半田市亀崎「潮干祭」で海浜に曳き下ろされる石橋組の山車「青龍車」の建造（明治二十四年）に携わっている。「身近に、すぐ腕の大工さんがいたことを意外と皆さん知らないでしょ。後世に名を残す横松大工の手が加わっていたことは寺の自慢です。本堂建立から二百年。とどこどころ傷みが目立ち、修理が必要なんですよ」。古寺を守っていかねばならない住職の言葉に力がこもる。本堂を後にする。境内の鐘楼堂を眺め友人が言う。「お寺の鐘をおもいつきり鳴らしてみたいです」「どうして?」「なんとなくです。秋だからですかねえ」「ええ?」。

シリーズ

阿久比を歩く ⑬



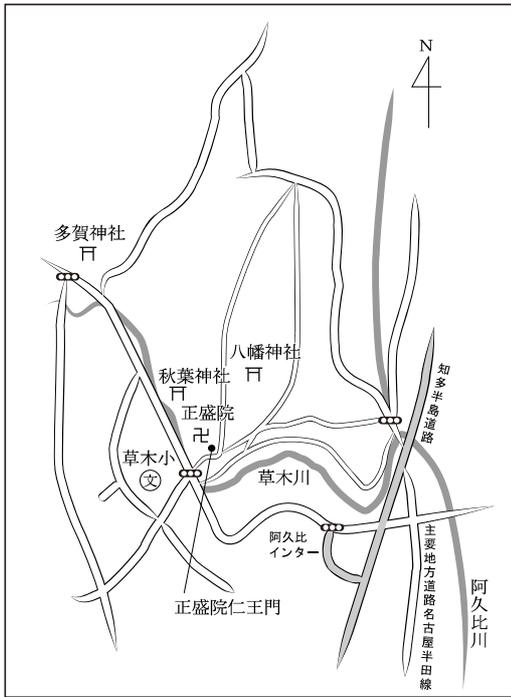
あぐいぶらり旅

建造物を見る（正盛院仁王門）



仁王門正面

草木地区にある正盛院を友人と二人で訪れ、町指定文化財「正盛院仁王門」を見た。
石畳の参道を登りきった場所に建つ、木造瓦葺切妻造の「仁王門」。寺院の建物を守る神、金剛力士「仁王」一対が左右に安置される門を「仁王門」と呼ぶ。
「太い柱は、柱組みが頑丈で解体できなくて、草木地区の力自慢が肩に担いで、今の場所に運んできた」と



先代の住職から聞いております」と正盛院住職が笑顔で話してくれた。

仁王門は、宝暦一（一七五二）年、正盛院の末寺「竜光寺（草木小学校西付近にあった）」に建立された記録が残る。明治十四年竜光寺が廃寺となり、翌年、村自慢の「仁王門と仁王像」を手放したくない思いから、草木の村人総出で解体することなく、正盛院の現在の場所に移す。

横の長さが三間（五・四六メートル）。左右に二本ずつ太い柱が立ち、その奥は仁王像が安置される部屋が設けられ、真ん中は境内入り口となる空間。部屋の中では、目を見開き、大きく口を開けた仁王と、固く口を結んだ仁王の二体の像が阿吽（あうん）の呼吸で門番を務める。

正盛院仁王門は、阿久比町が昭和五十五年、文化財「第一号」に指定した貴重な歴史的遺産。その両脇に納まる二体の仁王像（室町時代初期の作と推定。竜光寺建立時に京都から下る）も町指定文化財。
年輪を重ねた木造の門を森の木



桐の紋入りの鬼瓦がのる屋根

と勘違いしたのか、セミたちの抜け殻が柱や軒先に張り付く。大正九年に地元大工により補修された「門」も、年月が経過して所々傷みが目立つようになってきている。
力自慢の人たちが、解体せずに運んできたといふ「仁王門」。どっしりと腰を下ろす姿には風格があり、緻密な骨組みや瓦の葺き方などから、人々の力が加わった息吹が感じられる。

「君、きゃしゃな体だけど、柱を担ぐのを手伝ってほしいと言われたらどうする？」と私が友人に聞く。「もちろん手伝いますよ。最近、我が子をおんぶして、体鍛えてますから」。子どもが生まれる前までは「箸より重いものは持ったことがない」と自慢していた友人だった。..
参道を下る。木々の葉っぱが色づき始めた。少し早い、紅葉狩りを楽しむ。仁王門の屋根にはイチヨウの葉が積もり始めていた。

シリーズ

阿久比を歩く ⑬



下向きに曲線を 描く「破風板」

椋岡地区の古寺「鳳凰山平泉寺」を友人と訪れ『阿久比の建造物と彫刻 町文化財調査報告第三集』で紹介される山門の「破風」と「墓股」を見た。
淳和天皇が尾張国知多郡に鳳凰が舞い降りた夢を見て、それを見てくるように言われた慈覚大師円仁が、椋岡地区に立ち寄る。大師は、古井戸（唐松の井戸）を祈とうして、水をわかせ、水不足に苦しむ農民を

あぐいぶらり旅
建造物を見る（平泉寺山門）

「山門は記録が残っていません。ただ、十年前に少し屋根を直したとき、鬼瓦の近くに『寛政二年（一七九〇年）の文字が記されていることが分かりました。おそらく、その年号の記載は、修理の際に記されたものだと思いますので、それ以前から建っていた門でしょうね」と、寺の住職は話す。
屋根の一番高い部分が棟。棟をさかいとして、本を半分にかけて伏せた形のように両方に流れを持つ屋根が「切妻屋根」。その切妻屋根部分にある板が「破風」で、三角になっ

救った逸話を残し、天長七（八三〇）年平泉寺を開創し、天皇の夢にちなみ山号を「鳳凰山」と名付けたと伝えられる。
水の入った唐松の井戸をのぞき、平泉寺に続く細い参道を歩くと山門に着く。扉の開いた、入り口の開口部は高さ約二メートル。奥行きは約一・五メートル。四本の柱で重厚感のある瓦がのつた切妻屋根を支える。

境内を散策する「墓股はユニークな名前ですね。重い屋根を支えるのにカエルとは、ピンときませんが、カエルの足腰は強いんでしょうかね」と友人。「墓股の『墓』は『ひきかえる』と読むらしいよ。」「それでですね。ヒキガエルの足腰は強そうですね。納得です。」「・・・？」。来た道を引きかえることにした。

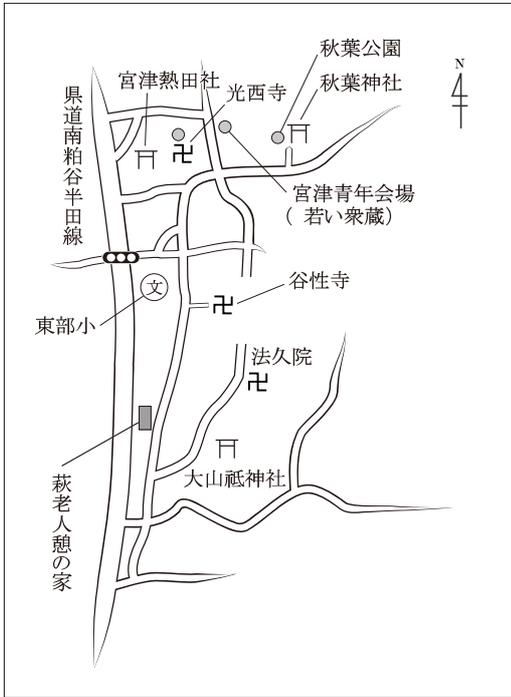
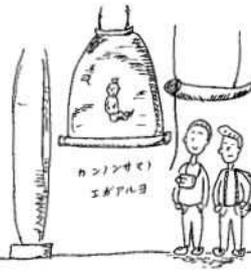
破風の奥に「墓股」が取り付けられる。近くで見ると横幅に厚みがある。カエルがまたを広げたような形から名付けられた建築様式。屋根の重みを支える横柱の「梁」の上に置き、支えと飾りを兼ねた受け木で、平安時代後期以降は主に装飾品として社寺建築などで使われる。
あるようだ。



破風の奥に取り付けられた墓股

シリーズ

阿久比を歩く ⑬



光西寺 鐘楼”

二〇一〇年最後のぶらり旅。相棒、友人と宮津地区の光西寺へ「鐘楼（しょうろう）」を見に出掛けた。鐘楼とは、時を知らせる鐘がつるされる建造物で「鐘つき堂」とも呼ぶ。光西寺は浄土真宗 真宗大谷派に属し、鐘は法要など仏事が開かれることを知らせるときに突かれる。寺は永禄四（一五六一）年に、秋葉公園の入り口付近から現在の場所に移ったとされ、鐘楼は大正十一年

あぐいぶらり旅

建造物を見る（光西寺鐘楼）

に地元の大工により再建された。木造瓦葺入母屋造で、重厚感のある屋根を支える部分に特徴が見られる。遠くから見ても目に留まる、軒下の木組み。斗拱（ときょう）と呼ばれ、大陸から伝わった建築様式。方形の斗（ます）と張り出す肘木（ひじき）を組み合わせ、柱上で軒を支える仕組み。くぎを使わないのも特徴で、湿気の変化で木が膨らんだり縮んだりするのを吸収して建物がゆがむのを防ぎ、地震や台風の揺れを吸収する効果もあるらしい。四方の隅とその間、計八カ所の斗拱。立体感のある芸術的な木組みは、一見の価値がある。

現役を退いた八十五歳の前住職に話を聞いた。

「鐘楼は私が生まれる前に、宮津の腕のいい大工が手掛け、彫刻は初代彫常です。若いころ、大工に会うたびに『もうけそこなっ たんだぞ』と冗談を言われました。地元の寺のためにと通常よりも低い建築費で請け負ってくれたんですよ」



立体感のある「斗拱（ときょう）」

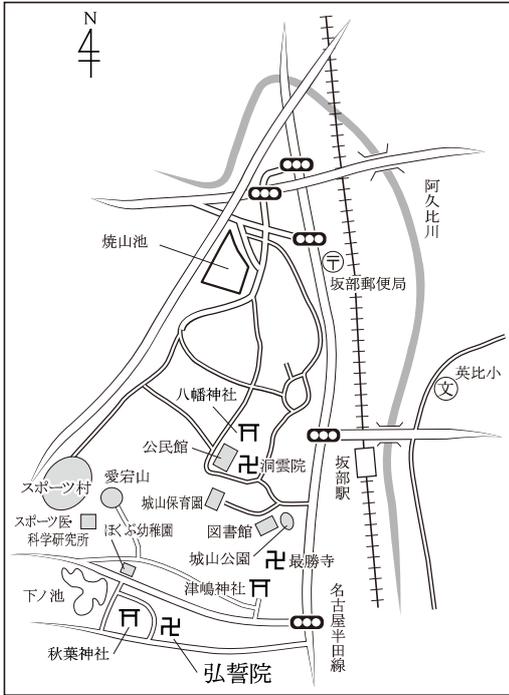
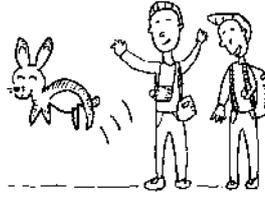
第二次世界大戦時に出された「金属類回収令」で日本中の多くの寺院の鐘が没収され、武器製造のために溶解されてしまう。光西寺の鐘も例外にもれず回収されてしまった。鐘楼に鐘を戻せないだろうか。寺を守ってきた地元の人々から話を持ち上がり、終戦から五年後の昭和二十五年、新しい鐘が鐘楼に戻る。

「鐘の中には、指輪や金と一緒に混ぜています。铸造の際に平和や先祖を敬う気持ちを込めて、寺を支えてきてくれた人たちが貴重な宝物を投げ入れてくれました。皆さんの願いが詰まった鐘です。老住職が手を合わせる。

許しを得て、鐘楼の土台に上がらせてもらい、鐘の下に立つ。声がこもり、エコーがかかっているようだ。「一言どう？」と友人に投げ掛ける。「そうですね。それでは僕の好きな言葉を。『皆さんに感謝』。『感謝、感謝、感謝……』。友人が素晴らしい言葉で一年を締めくくってくれた。

シリーズ

阿久比を歩く ⑬



旧本堂に取り付けられていた「鬼瓦」

「卯之山」というくらいですから、忘れたところに野ウサギの姿を見ることがあります。山にエサが無くなるとう里に下りて来るんでしょうね。畑の野菜を食べてしまうこともありますが憎めないかわいらしい顔ですよ」と、老住職の目元が緩む。

二〇一一年の干支は「卯」。卯年にちなみ、ウサギと縁の深い、卯之山地区の「兎養山弘誓院」を訪ねた。

―天台宗開祖伝教大師最澄は、全

あぐいぶらり旅

建造物を見る（弘誓院）

国行脚の際、阿久比の地に立ち寄り、下ノ池のほとりにさしかかる。その時、池の中央から金色の光が立ち昇り、どこからともなく現れた白ウサギが光めがけて飛び込み、一寸七分（約五七秒）の阿弥陀仏を口にくわえて大師の前に運んできた。その出来事を聞いた都の帝は大変喜び、勅願寺を建立し、「兎養山長安寺」と名付けるように命じる。大師は阿弥陀如来像を刻み、ウサギが運んできた仏をその胎内に納めた。寺の周辺は、「兎養山」の山号にちなみ「兎之山（うのやま）」と呼ぶようになる。

天台宗の長安寺は現在の弘誓院の前身で、七堂伽藍がそびえ立ち、五十余りの坊舎が立ち並ぶ広大な寺院であったと伝えられる。平治の乱や織田信長による焼き討ちなどで荒廃し、再建が繰り返された。天台宗から浄土宗へと改宗され、現在の地に「兎養山弘誓院」が開山されたのは天文二（一五三三）年。

山門から奥をのぞく。寄棟造の屋根に真新しい瓦がのった本堂が映る。



鳥窠に取り付けられた動物の正体はウサギ？

平成二十二年三月に新しく建て替えられた本堂がまぶしい弘誓院の境内に足を踏み入れる。

「面白いものを見せてあげますからこちらへどうぞ」と老住職に声を掛けられ、古い瓦が集められた場所に案内される。

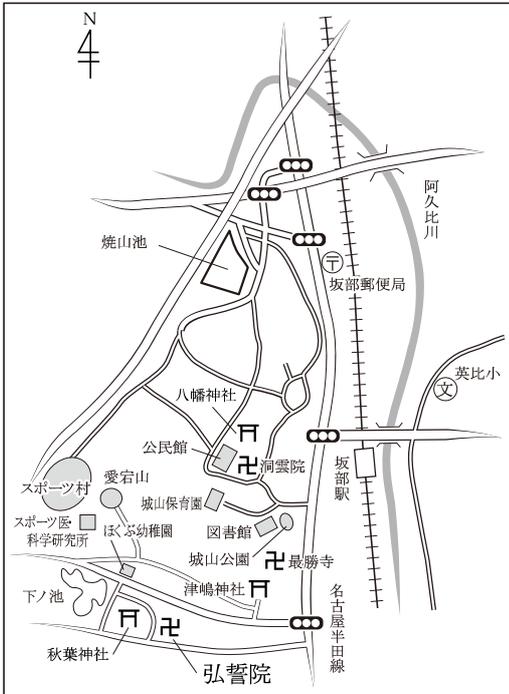
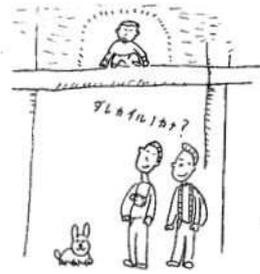
瓦は、安永四（一七七五）年に建立されたときとされる、旧本堂の屋根に取り付けられていた「鬼瓦」と「鳥窠（とりぶすま）」。鬼瓦の上部に一本飛び出した巴瓦のことを「鳥窠」と呼ぶ。鳥がよく止まる場所なのでそのように呼ばれるようだ。

「巴の部分が取れてしまっていますが、これが鳥窠です。珍しい動物が瓦に付いているでしょ。何だと思いませんか？」老住職が私と友人に問い掛ける。「もしかしてウサギですか？」

次号に続く。

シリーズ

阿久比を歩く ⑭



山門の奥に見えるのが新本堂

あぐいぶらり旅 建造物を見る(弘誓院②)

二〇一一年の干支「卯」にちなみ、
鬼と縁の深い、卯之山地区の「鬼養
山弘誓院」を訪れる。老住職に旧本
堂に取り付けられていた古い瓦を紹
介される。

(前号からの続き)
「耳が取れてしまっていますが、
実は「ウサギ」なんですよ」と老住
職。鳥衾にウサギが装飾されている
のは珍しいとのこと。

鳥が羽を休めていく場所に、ウサ
ギ。かわいらしい表情のウサギに鳥
たちも癒されたことだろう。

「新しくなった本堂の屋根にもウ
サギの鳥衾を残したいと考えまし
た。建築基準の関係でできません
でした。珍しいものですので、何らか
の形で残せればと思っております」

鬼瓦と鳥衾を見た後は、庫裏を案
内される。庫裏とは、寺院の台所や
居間を意味する場所。玄関を開け
ると、すぐ目に飛び込んできたのが、
むき出しの黒色に塗られた太い横柱。
頑丈な造りであることがうかがえる。
「大きな声では言えませんが天井
には、隠し部屋があります」と老住
職が小声で教えてくれる。戦国時代、
「落ち武者」が寺に駆け込んだり
という。そのとき、隠し部屋と呼ば
れる場所に落ち武者は逃げ込んだ。
「歩くと天井が落ちてくる仕掛けの
場所もあってね」と話が続く。庫
裏の中にはまだまだ、人に知らされ
ていない「からくり」がありそうだ。
抹茶をこちそうになる。茶道など



庫裏の太い横柱

まったく知らない二人。緊張しなが
らも両手で茶碗を持ち、急いで抹茶
を流し込む。「自由に飲んでもらえ
ばいいですよ」。お庫裏さんの優し
い一言に緊張が解ける。

弘誓院の本尊は「阿彌陀如来」。焼
き討ちなど繰り返されたが、本尊は
戦火を逃れることができた。現在阿
彌陀堂に安置される。

「本尊修復の際、阿彌陀如来像の
胎内が空洞になっていたことが確認
できました。ただ、ウサギが運ん
できたと思われる一寸七分(約五センチ)
の「仏」は見つかりませんでした。
おなかのすいた野ウサギがエサと勘
違いしてどこかへ運んでしまったの
かなあ」と、老住職の目尻が下がる。
二人でウサギのように軽やかに参
道を下り、弘誓院を後にした。今年
は卯年。どこかで「幻の仏さん」を
くわえた野ウサギに出会えることを
期待したい。

シリーズ

阿久比を歩く ⑭



雪が残る観音寺の屋根

高岡地区の観音寺を訪ねた。前日降った雪が寺の屋根に残り、解け出した雪は軒の先端を伝わり、滴となって地面に落ちる。「うあ」。雪解け水が私の首筋を伝わる。思わぬ冷たさに自然と声が上ががる。観音寺は知多四国八十八ヶ所霊場の十七番札所。現在の本堂は大正十三年から昭和元年まで三年かけて造られたもので、木造瓦葺方形造。方形造は「宝形造」とも書き、四つの

あぐいぶらり旅 建造物を見る(観音寺)

三角形の面で構成され、頂上の一点が中央に集まる屋根形式。

屋根中央には下の段から、「卍」の文様が浮き出た露盤、伏鉢、宝珠と呼ばれる「やきもの」が積み上げられる。仏教用語で「宝珠」は、あらゆる願いをかなえる不思議な珠を意味する。屋根形式は「宝形造」、頂上には「宝珠」と、この寺には何かすごい「お宝」が眠っているようだ。

「去年の夏、家族でデイズニースーへ遊びに行ったとき、アラビアンナイトの世界を演出した『アラビアンコースト』という場所があった。宮殿の上にタマネギのような宝珠が乗っていたのを思い出したよ」と私が友人に話す。宮殿は金銀財宝がたくさんあるところですよ。友人の瞳が輝く。

住職は不在だったが、留守番をする女性に寺の「宝物」について尋ねてみた。

五十年に一度しか開帳しない本尊の「十一面観音菩薩」。欄間などに施される彫刻。元禄二(一六



軒に張られた千社札

八九)年の表記がある「鯛口(軒下)につるし、参拝者が白布の綱で打ち鳴らす仏具。現在は寺内で保管)の三つを挙げてくれた。

「彫刻以外は、毎日お寺にいる私たちでも見ることができませんから、とても貴重なものだと思います」と女性がほほ笑む。

本堂正面で上を見ると軒には、所々参拝に来たことを示す「千社札」が張られる。名前や住所が記され、「小地谷」「大宮」など他県の地名が見られる。現在は巡礼回数で「納め札」の色が決められ、千社札を建物へ張る代わりに、その札が「納札箱」に入れられる。

白装束に身を包んだ老夫婦が境内を訪れた。二人は納経帳への朱印を済ませた後、赤札(巡礼二十回)に住所・名前・願いごとを書き、箱に納めて仲良く「般若心経」を唱える。未来永劫に残したい素朴な光景だ。「うあ」。雪解けの滴が友人の首筋に伝わったようだ。突然の大きな声が少しだけ二人の世界を邪魔してしまった。軽く頭を下げて寺を後にした。

シリーズ

阿久比を歩く ①42



“春日造り”の本殿

矢口地区の箭比神社に行き、春日造の本殿を見ることにした。背の高い木が何本も立ち並ぶ、鎮守の森に足を踏み入れる。社などが建つ境内までの空間は屋間でも薄暗い。長い石段の先に、明るく照らし出されたスポットが見える。その空間に多くの神が合祀される。そもそも、矢口地区の地藏山にあつたとされる社殿がこの森に移されたのが元禄七（一六九四）年。尾

あぐいぶらり旅

建造物を見る（箭比神社本殿）

張二代藩主徳川光友から土地を得て社殿を修築したと記録が残る。

コケのむした石段を上り切り、一面明るい日の差し込む空間に入る。拝殿まで進む。扉の中央に小さな開口部があり、そこから奥の「本殿」がのぞける。

少し失礼して拝殿の裏に回り、コンクリートブロック塀に囲まれた本殿を、近くまで行き確認。町文化財調査報告『阿久比の建造物と彫刻』の中で、本殿の造営は慶応元（一八六五）年と紹介。構造は木造桧皮葺春日造とされるが、屋根は銅板葺に替わっている。

春日造は神社本殿形式の一つで、世界遺産の「春日大社」本殿（奈良県奈良市）がその典型といわれる。屋根形式は切妻造・妻入りと呼ばれるもので、左右に曲線を描いて反り、正面には片流れの向拝（庇）が付けられる。屋根上には千木と堅魚木が装飾され、向拝の下に階段が設けられているのも特長。ブロック塀越しに本殿を見る。庇



箭比神社の森

を二本の角柱が支え、階段が続く。その奥は四本の丸柱が立ち、正面に扉、左右と後ろ面は板壁が覆う。屋根の上には千木と堅魚木も飾られ、春日造の定義とほぼ一致する。

「修学旅行で春日大社に行ったはずですが、社の形まで記憶にありません。シカにせんべいをあげて、手までなめられたことはよく覚えていますが」と友人。「僕は、みやげを買った貴重な小遣いを千円落として、先生からお金を借りる羽目になって、それ以外のことは覚えていないね・・・」と、私はつらい思い出を語る。

人里離れ、森の中の一画に存在する神社は、どこか神秘的なものを感じる。この場所だけに日が当たる厳かな雰囲気は、世間でブームになっている『パワースポット』なのかもしれない、勝手に想像を膨らませた。

シリーズ

阿久比を歩く ⑭



脇障子の左部分

立春、バレンタインデーを過ぎ、少しずつ春の気配を感じる時季となってきた。花粉の飛び散る量が昨年と比べものにならないほど多いらしい。春を先取りする私の目の周りはずでにかゆい。そんな春の到来を感じながら、福住地区の縣神社を友人と二人で訪ね、本殿の脇障子を見た。

縣神社は小高い丘の上に建つ。昨年の十月、二十年に一度の遷宮奉祝

あぐいぶらり旅
建造物を見る(縣神社「脇障子」)

立春、バレンタインデーを過ぎ、少しずつ春の気配を感じる時季となってきた。花粉の飛び散る量が昨年と比べものにならないほど多いらしい。春を先取りする私の目の周りはずでにかゆい。そんな春の到来を感じながら、福住地区の縣神社を友人と二人で訪ね、本殿の脇障子を見た。

祭が行われた。その際に新調された長い石の階段の白さがまぶしい。しっかりと靴の泥を払い、階段を上る。

この神社は尾張開拓の祖神とされる大縣主命などをまつる福住地区の氏神。「二ノ宮大明神」として明暦四(一六五八)年創建と記録が残る。社宝は「かわずの面」と呼ばれる「翁の面」。雨乞いの神事に使われ、恵みの雨をもたらしという。

拝殿正面につり下げられた直径三十センチほどの鈴を鳴らし、頭を下げて、奥の本殿へと回る。大正十五年に改築された本殿はずっしりと重厚感がある。木鼻や虹梁などに装飾されたきめ細かな彫刻が質感を高める。階段上の左右に分かれる縁の先は「脇障子」と呼ばれる聞きなれない建具。行き止まりの場所に置かれ、ついたてのようにさえぎるものを意味する。

脇障子にも、左右ともに「獅子」の彫刻が施される。作者は不詳。
「獅子の子落とし」自分の子に苦



縣神社本殿

難の道を歩ませて鍛えることの例え。彫刻は、まさにその場面が描写される。滝に落ちた子獅子をがけの上から親獅子が眺める。

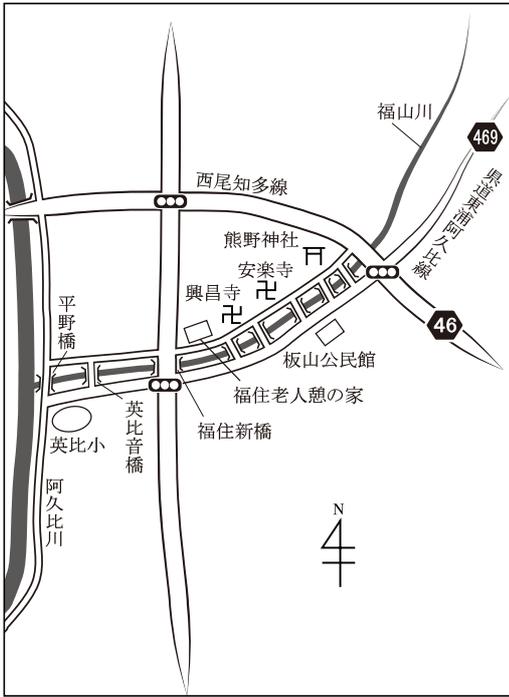
「僕はこのような場面手塚治虫さんのアニメ『新ジャングル大帝』で見ましたよ」と友人。「僕は、巨人の星」だったかなあ。子どものころに見たアニメの話で盛り上がる。

背景には渦巻き状のものが散らばる。「あの渦何だろうね？」と私が首をかしげる。「唐獅子と言えば、牡丹じゃないですか」「なるほど」「獅子に牡丹」。取り合わせのよいものを例えるときに使う表現だ。友人の言葉から、渦は雲にも見えるが、「牡丹」の花にも見える。

「障子がこんな場所で使われるのはなぜだろう?」「脇が甘いと、神様が逃げちゃうからじゃあないですか」。友人の説得力のある「脇障子」の推測にうなずいた。

シリーズ

阿久比を歩く 144



虹梁上に施された馬の彫刻

「知多路の春は知多四国弘法参りで始まる」。よく使ってきたフレーズだが、今年もそんな季節となった。知多四国八十八所霊場第十三番札所「安楽寺」の山門をくぐる人々の姿を見てあらためて春を実感する。寺院建築物群を「伽藍」と呼び、板山地区安楽寺には、本堂、観音堂、「弘法堂」、「地藏堂」、「経蔵」などが配置される。友人と二人で「ぶらり旅」を始め

あぐいぶらり旅 建造物を見る(安楽寺)

たのがこの「安楽寺」。ひよんなことから、町内の弘法寺巡りをしようと思いついたこの企画。あれから六年。私たちは原点に戻ってきた。「君はあのころ彼女もいなかったし、おちよこちよいで……。今では妻子ある一家のあるじかあ」。友人と過去を振り返り境内に歩を進める。弘法堂の前は、巡礼者のお参りが後を絶たない。本堂に向かって左横に建つ、観音堂を見る。木造瓦葺入母屋造で明治三十三(一九〇〇)年の建立。町文化財調査報告「阿久比の建造物と彫刻」には、知多地方の山車造営に関わった横松大工の江原氏が携わったことが紹介される。正面ひさしの向拝と呼ばれる部分の虹梁上には、馬の彫刻が施される。竜や獅子の彫刻はよく見掛けるが馬の彫刻は珍しい。観音堂には、九年ごとに開帳される秘仏「聖観世音菩薩立像(平成二十年開帳)」が安置される。寺には奈良時代の僧行基の作で、仏像に祈願をしたら不自由な足が治ったという



大般若経などが納められる経蔵

話が伝わる。この寺では、毎年二月の最終日曜日に厄年の皆さんの厄払いが行われるとのこと。その際に大乘仏教初期の多くの経典を集めた「大般若経」を転読しながら、厄払いをする「大般若祈禱会」がなされる。その「大般若経」などが納められている場所が「経蔵」。木造瓦葺方形造で、格子の隙間から、幾重にもなった白い紙が見える。「経」の多さに驚く。境内で「お参りですか」と老夫婦に声を掛ける。暖かくなってきたから、知立から出てきました」と笑顔で答えてくれる。「今の夫婦の姿が老後の理想なんだよね。二人仲良くお寺参りをして、昼はどこかの店でランチを食べて、三時には喫茶店でコーヒーを飲みながら僕はスポーツ新聞で、妻は女性週刊誌を読む。どう?。」「いいですよ。ね。夜は温泉につかれれば言うことなし」。まだまだ先?のことと思いつつ、車に向かう老夫婦の後ろ姿を見送った。